

# 17 世紀末および 18 世紀初頭のフランス語におけるリエゾン —スタイルの影響の考察—

近藤野里

## 1. はじめに

本研究では、17 世紀末および 18 世紀初頭のフランス語のリエゾンに、スタイルの違いがどのように影響するのかを考察することが目的である。今日まで、この時代のフランス語におけるリエゾンはあまり注目されてこなかったといっても過言ではないだろう。これは、音声現象であるリエゾンをそもそも実際に録音された音声からではなく、文献のみを頼りにした調査においてどのように研究できるのか、という問題点がある。本研究ではこの問題点を克服するために、17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の文法家 René Milleran と Gile Vaudelin によって書かれた、語末子音字の発音の有無を確認することが可能な文献をコーパスとして使用する。17 世紀末のコーパスとして René Milleran (1694) の文法書 *Les deux grammaires françaizes* を、18 世紀初頭のコーパスとして Gile Vaudelin (1713, 1715) の文献 *Nouvelle manière d'écrire comme on parle en France* および *Instructions crétiennes, mises en orthographe naturelle, pour faciliter au peuple la lecture de la Science du salut* を用いる。本研究では、この 2 つのコーパスにおいてリエゾンの実現がどのように異なるのかを観察し、スタイルの違いについて考察を行う。

## 2. 社会言語学的マーカーとしてのリエゾン—現代フランス語の場合

17 世紀以降、文法書や規範記述において、詩の朗読、演説ではより多くリエゾンをする一方、会話においては最低限のリエゾンを実現することが望まれるというような説明が多く見受けられる。フランス語に関する社会言語学的研究では、1 人の発話者が使い分けるスタイル、そして発話者の間に存在する社会的特性の違いがリエゾンの実現に与える影響について考慮されてきた。例えば、Gadet (2003a : 15) が、Coseriu (1988) に基づいて分類した<sup>1)</sup>社会言語学的変種は、発話者間変種（話し手による変種）と発話者内変種（言語使用における変種）の大きく 2 つに分類され、それぞれに下位分類が設けられている。

発話者間変種は、社会における発話者の特徴が反映されるものである。それらは、通時的、空間的、社会的といった 3 つの変種に分類される。

1. 通時的：時間的変移が言語にもたらす影響のことを指す。時代によって言語の規範が変化するのは、この通時的変化のためである。
2. 空間的：地域や地方によって言語に違いが見られる。
3. 社会的：時代、地域が同じであっても、発話者はその社会的立場によって異なる話し方をする。

発話者内変種は言語使用において発話者自身が持つレパートリーから生じる。この変種には 2 つの下位

分類がある。

4. 発話状況とスタイル：発話者はその発話状況によって話し方を変える。会議や面接のような形式的な状況では、規範的な形が理想的である一方で、友人との会話のような私的な発話では、規範に従う必要があるとは限らない。
5. 伝達手段による変種（書き言葉/話し言葉）：書き言葉と話し言葉には違いが見られる。

本研究に深く関わると思われる変種として、発話者内変種が挙げられる。発話状況とスタイルについて、Delattre (1966: 40)は、リエゾンの実現はスタイルの選択に依存するとし、以下の4つの発話スタイルにおけるリエゾンの実現コンテキストを提示している。

- ① 親しい間柄での会話では、選択的リエゾンほとんど、または全く実現されない。  
例：Des [z] hommes/ illustres/ ont/ attendu.
- ② 丁寧な会話では、リエゾンの頻度は日常会話に比較して増える。  
例：Des [z] hommes/ illustres/ ont [t] attendu.
- ③ 会議での会話では、リエゾンは頻繁に実現される。  
例：Des [z] hommes [z] illustres/ ont [t] attendu.
- ④ 詩の朗読では、全ての、またはほとんどのリエゾンが実現される。  
例：Des [z] hommes [z] illustres<sup>2)</sup> [z] ont [t] attendu.

Delattre が挙げた例では、①親しい間柄の会話では、限定詞と名詞の間における義務的リエゾンのみが実現される一方で、④詩の朗読のような書き言葉に重点が置かれるような状況では、全てのリエゾンコンテキストにおいてリエゾンが実現される。Booij & De Jong (1987)も Delattre (1966)と同様に、丁寧な発話スタイルが用いられる場合には、リエゾンが実現する確率が増加すると述べている。スタイルの選択は、発話を取り巻く状況によって決定される。つまり、発話者がどのような状況で話すのか、もしくは発話をする相手（発話の受信者）が誰であるのかが考慮される。このような傾向が反映されているのは次に挙げる例である。Léon (1971)はド・ゴール大統領の10回の演説を資料体として分析した結果から、その演説環境によって選択的リエゾンの実現率に差があることを示した。ド・ゴール大統領が1960年にロンドンで行った演説では選択的リエゾンの実現率が100%であり、1961年にフランスのある地方で行った演説では9%と、大きな違いが観察された。つまり、このような結果が生じたのは発話状況の違いが原因であろう。この実現率の相違を Léon (1971)は、丁寧なスタイルを使用するか否かに結び付けている。このことは、発話者が発話状況もしくは発話の受信者に応じてスタイルを変える、応化(accomodation)が行われることを示す。つまり、政治演説が高尚なスタイルが要求されるものであったとしても、その発話の受け手の特徴を含めた発話状

況を正確に判断し、適切なスタイルを選択するという姿勢が見られる。このような演説の例は、選択的リエゾンの実現が公的な場で良しとされる傾向にある一方で、発話の理解度や親密性の欠如を引き起こす可能性があるということを示している。

一方で、Mallet (2008)によれば、発話状況によってリエゾンの実現がそこまで大きく異なるわけではないようである。インタビューアとの会話 (45,9%)と自由会話 (44,1%)におけるリエゾン実現率の違いはほとんどない。<sup>3)</sup> Mallet (2008)は、この結果の理由の一つとして、リエゾンが会話のスタイルの違いに大きな影響を持たない可能性があることを指摘している。しかし、テキストの朗読 (63%)と会話 (45%)におけるリエゾン実現率の違いは明白である。綴り字が与える視覚的情報は、リエゾンの実現により影響を与えることが考えられる。リエゾンの実現には伝達手段による違いの影響を受けた発話スタイルの差、つまり書き言葉の朗読と話し言葉の違いも考察に入れるべきであろう。

### 3. コーパスについて

#### 3.1. Milleran コーパス

本研究では17世紀末の資料としてRené Milleranの文法書*Les deux grammaires françaizes*を使用する。この文法書は400ページにわたって、フランス語の発音に関する説明が書かれた文献である。Milleranの文法書*La Nouvelle grammaire françoise*は1692年にマルセイユにおいてHenri Brebion社から出版される。その後、1694年に第二版が*Les deux grammaires françaizes*という名前で再版されている。本研究では第二版のリプリント版(Slatkine, Genève, 1973)をコーパスとして使用する。<sup>4)</sup> Milleranは綴り字の発音の有無を示すために特別な表記法を用いている。つまり、発音されない綴り字は、立体で書かれた文章において、発音されない子音の綴り字はイタリック体によって表記される。これは、イタリック体で書かれた文章においても同様で、この場合には発音されない子音の綴り字は立体によって表記される。<sup>5)</sup> 例えば、下記の例は立体で書かれた文章である。

**Comme la première chose qu'on doit apprendre absolument, est l'ortographe, je me suis appliqué avec toute l'exacritude possible à en**

comme la première chose qu'on doit apprendre absolument, est l'ortographe,  
je me suis appliqué avec toute l'exacritude possible à en....

図1: 表記法の一例

上記の例の場合には、*absolument*の語末の*t*、*est*の語末の*st*、*avec*の語末の*c*がイタリック体で表記され、これらの綴り字は発音されないと解釈できる。ただし、この表記法はMilleranの綴り字改革の一部に組み込まれているわけではなく、文法書を読む人々に「フランス語の発音を正しく学ぶ」ことを可能にすると

いう考え方が的確である。発音しない子音字に何らかの印を付けるという手段は、既に Palsgrave (1530)、Dubois (1531)、Saintliens (1580)によっても使用されている (Crevier, 1994 : 12)。

### 3.2. Vaudelin コーパス

Vaudelin による 2 つの書、*Nouvelle manière d'écrire comme on parle en France* (以下、NM)は 1713 年に、*Instructions chrétiennes, mises en orthographe naturelle, pour faciliter au peuple la lecture de la Science du salut* (以下、IC) は 1715 年にそれぞれパリで出版された。Cohen (1946 : vii)によれば、Vaudelin は改革派オーギュスタン派に属する知識人であった。一方で、Vaudelin の出生年および出生地はこれといって明らかではない。Martinet (1969 : 167)が「Vaudelin は自分のことばではないものを観察し、記述することができた (« [...] qu'il saurait observer et décrire un autre parler que le sien. »)」と述べているように、Vaudelin の記述したフランス語は当時の規範から大変かけ離れたものではない。また、Vaudelin の文献では当時の発音が彼によって考案された発音記号によって記されている。以下は、Vaudelin (1713, 1715)からの抜粋とその転写例である。<sup>6)</sup>

#### Reflaciq.

I. Si d'Ecrir ôtrma ce l'ô Parl a  
Frans, i n'an ariva ce pe ô ce de ptiz  
icoveniã ; e fi l'ô ne s'ai plainiã po-i  
partô, e dpui lq-ta , parson n'ora  
jama pafe a la Reform del'Ortograf  
Frafãz.

#### Reflaicsion.

I. Si d'Ecrir ôtrman ce\* l'on Parl an Frans, i n'an n arivai ce\* peu ou ce\* de\* ptiz  
inconveniãn ; e si l'on ne s'ai plainieai po-in partou, e depuis lon-tan, pairson n'orai  
jamai panse a la Reform de l'Ortograf Fransãiz.

図 3 : Vaudelin の発音記号の転写例

### 3.3. 2 つのコーパスを比較する意義

Milleran (1694)の文献は 17 世紀末に、そして Vaudelin (1713, 1715)の文献は 18 世紀初頭に出版されているため、通時期的変化が観察されることが期待できるかもしれない。しかし、20 年という期間は通時期的変化を観察するためには少々短すぎるとも考えられる。Vaudelin の発音記号は既に 17 世紀末にアカデミー・フランセーズに提出されており、<sup>7)</sup>実際にはこれら 2 人の著者は同時代を生きたと想定する方が的確である。<sup>8)</sup> よって、本研究ではむしろ、これらの 2 つの文献に用いられているスタイルが決定的に異なるという仮説を設定する。それでは、Milleran と Vaudelin の文献の間にはどのようなスタイルの違いが観察されるのだろうか。これら 2 つの文献の目的には、「良き」発音を教えるためという共通点はあるものの、本の趣旨は異

なる。まず Milleran の書は文法書であり、発音に対する説明書きが多い。それに対して、Vaudelin の書は特に IC の方では折りと教理問答が発音記号で記してある。この違いから Milleran (1694) のフランス語はより文語的であり、反対に Vaudelin (1713, 1715) のフランス語はより口語的であるということが考えられる。また、2 つの文献には、特に疑問符の数に顕著な違いがあることも明らかであった。

	Milleran	Vaudelin
疑問符の数	126 個	381 個
コーパスの語数	66663 語	20889 語

表 2 : Milleran コーパスおよび Vaudelin コーパスにおける疑問符の数の比較

以上の表から、Vaudelin コーパスは Milleran コーパスの約 3 分の 1 の語数を含むが、約 3 倍の疑問符の数を含むことが明らかである。Milleran の書は文法書であり、主にアルファベットの発音を説明する文章がほとんどである。よって、疑問文のようなものは例文として含まれるものの、会話の一部として表れることはない。それに対して、Vaudelin (1713, 1715) の文献がより口語的であると解釈する理由は、例えば Vaudelin のテキストには対話と捉えることができる疑問文とそれに対する返答文が交互に続くことが多いという点である。

#### 4. 分析

以下ではまず、両コーパスにおける全体的なりエゾンの実現傾向を観察する。また、両コーパスの比較において顕著な違いがみられたコンテキストを提示する。また、このコンテキストについての 17 世紀および 18 世紀の文法家の証言も引用しつつ、発話スタイルの違いとリエゾンの実現の関係性を考察する。

##### 4.1. 両コーパスにおける全体的なりエゾンの実現傾向

それぞれのコーパスにおける、リエゾン実現率は Milleran コーパスでは 75,4%、Vaudelin コーパスでは 68,9% である。

	全体のコンテキスト数	リエゾンが実現した コンテキスト数	リエゾン実現率 (%)
Milleran	3673	2772	75,4%
Vaudelin	1965	1354	68,9%

表 3 : コーパス全体のリエゾン実現率

Milleran コーパスでは Vaudelin コーパスよりもリエゾンの実現率が高いことが明らかである。ただし、各コンテキストの違いを細かく見ていくと、より顕著な違いが観察される。これについては、以下で詳しく説明する。

#### 4.2. 両コーパスの比較

両コーパスを比較すると、特に(a)「名詞+形容詞」、(b)「名詞+動詞」、(c)「+接続詞 *et, ou*」のコンテキストにおいて顕著な違いが観察された。以下ではそれぞれのコンテキストについて、より詳細な観察および考察を行う。

##### (a) 「名詞+形容詞」コンテキスト

「名詞+形容詞」のコンテキストには、単数形および複数形がある。Milleran コーパスにおいては単数形および複数形どちらにおいてもリエゾンの実現が観察される。それに対して Vaudelin コーパスにおいてはリエゾンの実現は全く観察されない。以下に実現率を示した表を提示する。

	Milleran	Vaudelin
単数形	75% (18/24)	0% (0/30)
複数形	34,61% (9/26)	0% (0/13)

表 4 : 「名詞+形容詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

「単数形名詞+単数形形容詞」のコンテキストについて、例えば Buffier (1709 : 395) は親しい間の会話において語末子音字の発音は必要ないとしている。以下に Milleran コーパスで観察された例を提示する。

リエゾンコンテキスト		リエゾン実現あり	リエゾン実現なし	合計
<i>accent</i>	<i>aigu</i>	12	3	15
<i>mot</i>	<i>admirable</i>	1	0	1
	<i>entier</i>	1	0	1
<i>point</i>	<i>interogant</i>	1	2	3
<i>chat</i>	<i>huant</i>	1	0	1
<i>art</i>	<i>ingenieux</i>	1	0	1
<i>dent</i>	<i>oeilleure</i>	1	0	1
<i>defaut</i>	<i>involontaire</i>	0	1	1

表 5 : 「名詞+形容詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

以上の表からは、少なくとも Milleran のコーパスの「単数形名詞+単数形形容詞」のコンテキストでリエゾンが実現されるのは、語末子音字が *r* の場合のみであることがわかる。

次に、「複数形名詞+複数形形容詞」コンテキストにおいて、Milleran コーパスではリエゾンの実現率は 34,61%と低めではあるが、リエゾンの実現が観察された。それに対して、Vaudelin コーパスにおいてはリエゾンの実現が観察されなかった。以下に、Milleran コーパスにおいて観察されたリエゾンコンテキストの例を挙げる。

**リエゾンが実現する例 (Milleran コーパス)**

Il en est de même des **mois** étrangers. (2 : 176)

Il en faut excepter les 7. Dérivés des **Langues** étrangères [...](1 : 74)

**リエゾンが実現しない例 (Milleran コーパス)**

X. dans les **noms** ordinaires, [...](2 : 173)

Milleran のフランス語が書き言葉的であり、Vaudelin のフランス語が口語的であるという特徴を持つと仮定した場合に、このコンテキストにおけるリエゾンの実現は口語においては特に求められないということである。Buffier(1709:394)が、「しかし、大変高尚な発音においては、*r*もしくは*l*の後の語末の*s*は発音されることもある。」と述べているように、書き言葉を読むように話されたフランス語では、このタイプのリエゾンは実現されてもおかしくないわけである。

**(b) 「名詞+動詞」**

「名詞+動詞」のコンテキストにおいて、Milleran コーパスではリエゾンの実現が観察され、リエゾン実現率は 53,13%である。それに対して、Vaudelin コーパスではリエゾンの実現は観察されない。

	Milleran	Vaudelin
「名詞+動詞」	53,13% (17/32)	0% (0/16)

表 6 : 「名詞+動詞」コンテキストにおけるリエゾン実現率

Chiflet (1659)が挙げた例文を見ると、このコンテキストにおけるリエゾンの実現は可能であるようだが、常にリエゾンが実現されるわけではないことも察せられる。例えば、Chiflet(1659)は以下のような例ではリエゾンが実現されると説明している。

- *Tout le camp est alarme* (p.207)
- *Les rangs estoit doubles* (p. 208)

それに対して、以下の例では、語末子音字-tを発音しないように指示している。

- *L'estat / est en trouble* (p. 209)

Vaudelin コーパスについては、このコンテキストではリエゾンの実現が全く観察されない。それに対して、Milleran コーパスではリエゾンの実現は観察されるものの、それほど安定的にリエゾンが実現するわけではない。残念ながら、文法書において、このコンテキストのリエゾンについての説明を発見することができなかった。よって、もし両コーパスの比較にのみ依拠するのであれば、「名詞+動詞」コンテキストについては、おそらく韻文の朗読および演説ではリエゾンの実現は可能ではあるが義務的というわけではなく、会話ではリエゾンを実現する必要がないと解釈できる。

(c) 「+接続詞 *et, ou*」

接続詞 *et* および *ou* とその先行語のコンテキストでは、Milleran コーパスではリエゾンの実現が可能である。まず、接続詞 *et* の前ではリエゾンの実現率が 34,45%、そして接続詞 *ou* の前ではリエゾンの実現率は 35,34%である。それに対して、Vaudelin コーパスでは、接続詞 *et* の前ではリエゾンの実現率が 0%、そして接続詞 *ou* の前ではリエゾンの実現率は 11,11%である。

	Milleran	Vaudelin
+接続詞 <i>et</i>	34,45% (41/119)	0% (0/125)
+接続詞 <i>ou</i>	35,34% (41/116)	11,11% (1/9)
合計	34,89% (82/235)	0,75% (1/134)

表 7: 「+接続詞 *et, ou*」 コンテキストにおけるリエゾン実現率

Milleran コーパスにおけるリエゾン実現率は Vaudelin コーパスよりも高いが、この実現率の数値は決して高いとは言えない。Vaudelin コーパスにおけるこのリエゾン実現率の低さは、丁寧なスタイルが用いられた場合においても、このコンテキストではリエゾンの実現はそれほど要求されないということを示している。

「+接続詞 *et, ou*」におけるリエゾンの必要性について、Chiflet (1659)の提言は幾分か曖昧なものである。Chiflet (1659: 205)は「*Peti & Joli. Bon & beau. Gran & gros. Devan & Derriere. Il alloi & venoit. Allan & venant. Veut-on aller là, &c.*」のようなコンテキストでは子音を発音しないと指示しているのに対して、*sang* と *bourg* について *sang & la vie* および *le bourg & la ville* については、接続詞 *et* の前で *sanc* および *bourc* と発音するように指示している。また、Restaut (1732: 313)は「+接続詞 *et*」の例文を提示し、会話において接続詞の前でリエゾンを実現することは学識をひけらかすような振る舞いであると批判している。つまり、*Mes*



*freres & vos soeurs* の名詞 *freres* の語末の *-s* は接続詞 *et* の前においてリエゾン子音として発音されないということである。Restaut (1732: 313) の説明からは、接続詞 *et* の前でリエゾンを実現することは、韻文の朗読や演説では可能であるが、会話において必要とされていないことが明白である。<sup>9)</sup>

## 5. 考察および結論

以上で見てきたように、特定のコンテキストにおいて、Milleran コーパスではリエゾンの実現があり、それに対して Vaudelin コーパスではリエゾンの実現がほとんど観察されないことが明らかであった。この結果が意味することは、この時代により丁寧な発音をすることを心掛ける場合に、特定のコンテキストにおいてリエゾンを実現することが必要とされていたということである。この特定のコンテキストというのが、分析の節で観察した「名詞+形容詞」、「名詞+動詞」、「+接続詞 *et, ou*」である。

本研究では、2つのコーパスで用いられているスタイルが決定的に異なるという仮説を立てた。つまり、Milleran コーパスではより文語的なスタイルが用いられ、反対に Vaudelin コーパスでは口語的なスタイルが用いられるということである。Buffier や Restaut によって書かれた文法書においても、しばしば大変高尚な発音、韻文の朗読や演説などでは特定のコンテキストでのリエゾンが実現可能であるという説明が見受けられた。そして、Milleran コーパスにおいては、そのようなリエゾンの実現が実際に観察された。一方、Vaudelin コーパスではそのようなコンテキストではリエゾンの実現が観察されない。また、会話においては学識をひけらかすようなリエゾンの実現に対して批判的な見解も見受けられたわけである。つまり、書き言葉を読むという行為と会話という行為の間に、リエゾンの実現をすべきか否かという判断に関わる違いが存在したことは明らかである。確かに、書き言葉を読むという行為には、視覚的情報が与えられる可能性が常にあり、そのために綴り字の発音に忠実な発音が求められるということが想定できる。2節でも述べたように、現代フランス語のリエゾンを対象とした Mallet (2008) の研究結果では、特にテキストの朗読と会話におけるリエゾン実現率に明白な差異が観察された。Milleran コーパスと Vaudelin コーパスにもこのような伝達手段の違いによる影響を受けた発話スタイルの差、つまり書き言葉と話し言葉の違いが明白に表れているといえるだろう。

## 註

- <sup>1)</sup> Gadet (2003b: 18) はフランスにおける社会言語学を受容の特徴について以下のように説明している。「フランスにおけるアメリカの理論の優勢は明白である。なぜなら、フランスでは「地域的」、「社会的」そして「スタイル」という変種のラベルが使用されていた。他のヨーロッパの国々のほとんど、もしくは少なくともロマンス語学においては、1952年に Flydal が作成し、Coseriu が発展させた‘diatopic’, ‘diastratic’, ‘diaphasic’ variation というラベルが使用されていた。」この引用に関して、Gadet (2003b) が参考文献として挙げているのが以下の2つの文献である。  
Flydal, L. (1952). Remarque sur certains rapports entre le style et l'état de langue. *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap*, 16, pp. 241-258.  
Coseriu, E. (1988). *Einführung in die allgemeine Sprachwissenschaft*, Tübingen: Francke.
- <sup>2)</sup> Durand & Lyche (2008)によれば、主語となる名詞句とそれに後続する動詞の間でリエゾンが実現される

ことはかなり特殊なレジスターに限られる。

- 3) Mallet (2008)は、この違いに有意差があるか否かについて、統計を用いて確認を行ったわけではない。
- 4) 第二版を使用する理由は先行研究である Crevier (1994)の調査結果と照らし合わせるためでもある。
- 5) Milleran (1694 : 0 : 13)を参照した。また、この方法を Crevier (1994)は *exponctuation* と呼ぶ。
- 6) Vaudelin (1713, 1715)の発音記号については川口(2010)および Kawaguchi (2011)を参照のこと。
- 7) Vaudelin (1713, NM, p.30)は以下のように述べている。「En 1692, ce système (moins touché) fut envoyé à l'Académie Française, qui deux ans après donna des marques publiques de l'estime (...)」(1692年にこの方法はアカデミー・フランセーズに送られ、2年後に評価の公印を与えられた。)
- 8) 残念ながら、Vaudelin の出自および生年を示すような文献は見つかっていない。
- 9) 現代フランス語において、このコンテキストのリエゾンを選択的であるが、定型表現的な連辞においてはリエゾンの実現は義務的である。そのようなコンテキストとして、Delattre (1966 : 47-48)は「*Mesdames et Messieurs, pieds et poings liés, ses faits et gestes, monts et merveilles, ponts et chaussées, arts et métiers, tant et plus, nuit et jour*」を例として挙げている。

## 参考文献

- Booij, G. & De Jong, D. (1987). The domain of liaison: theories and data. *Linguistics*, 25, pp.1005-1025.
- Buffier, C. (1709). *Grammaire française sur un plan nouveau*, Paris : Nicolas le Clerc.
- Crevier, I. (1994). *La liaison à la fin du XVIIe siècle dans la Nouvelle grammaire française de René Milleran de Saumur*.  
Thèse de Ph.D. Montréal: Université de Montréal.
- Chiflet, L. (1659). *Essay d'une parfaite Grammaire de la langue française*. Anvers : Jacques van Meurs (Réimprimé  
Slatkine Reprints 1973).
- Cohen, M. (1946). *Le français en 1700 d'après le témoignage de Gile Vaudelin*. Paris : Librairie ancienne Honoré  
Champion.
- Delattre, P. (1966). *Studies in French and comparative Linguistics*. The Hague: Mouton.
- Gadet, F. (2003a). *La variation sociale en français*. Paris : Ophrys.
- Gadet, F. (2003b). Is there a French theory of variation ? *International Journal of the Sociology of Language*, 160, pp.17-40.
- Kawaguchi, Y. (2011). French Liaison in the 18th Century -Analysis of Gile Vaudelin's textes -. Corpus-based Analysis  
in *Diachronic Linguistics*, Y. Kawaguchi, M. Minegishi, W. Viereck (eds.), John Benjamins, pp.133-151.
- Léon, P. (1971). *Essais de phonostylistique*. Paris : Didier.
- Mallet, G. (2008). *La liaison en français: descriptions et analyses dans le corpus PFC*. Thèse de doctorat : Université  
Paris Ouest-Nanterre-La Défense.
- Martinet, A. (1969). *Le français sans fard*. Paris : Presses Universitaires de France.
- Restaut, P. (1732). *Abrégé des regles de la versification française*. Poitiers : Barbier succ. Faulcon.
- 川口裕司 (2010). 「18世紀フランス語におけるリエゾン Gile Vaudelin 文献の予備的調査から」, 『コーパスに基づく言語学教育研究報告 5』, pp.119-153, 東京外国語大学大学院総合国際学研究所